

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

小川 軽舟 選

西村 和子 選

井上 康明 選

咲くものに止まるでもなく秋の蝶

川口市 高橋さだ子

△評▽花の蜜を吸いに飛んできたわけではないというところに季節を感じさせる。夏のチョウとの違いをとらえた。

風のなき時は乱れて秋の花

町田市 枝澤 聖文

△評▽ほかの花なら風によって乱れそうなものを、ハギは風に吹かれてこそ見たのである。

本に指狭みて眠る虫時雨

川越市 大野有之介

秋晴やポストにはがき落つる音

宗平 圭司

サフランを咲かせ幸せさうな家

久喜市 梅田ひろし

対岸のところに彼岸花

羽生市 小菅 純一

亡き母の椅子も並べて月を待つ

北九州市 篠原 敬祐

この家も空家となれり木樫咲く

伊賀市 菅山 勇二

店先の大根太くなりけり

前橋市 西村 晃

風立てば風になつき秋揺るる

高槻市 黒田 豊子

干し物を取り込む男秋暑し

古賀市 大野 兼司

△評▽通りすがりに見た男の姿が頭から離れない。いつかその男と同じ境遇になる予感をぬぐいきれずに心がざわぐ。

病室の白き光や星月夜

上尾市 鈴木 良二

△評▽病人を眠らせた後、病室の白い寝具や白い壁が星月夜にほのかに浮かび上がる。

角打ちの菜つ葉服にも赤い羽根

川口市 渡辺しゅういち

秋雨や仕事の本を処分する

倉敷市 中路 修平

秋の風集落ひとつ人知れず

奈良市 浦城 亮祐

朝月夜野の二川をあかあかと

福津市 瀧 あき子

秋高しスクラム固く地面這う

奈良市 大塚 裕子

露けしや蹴かつぎ行く群の怪

奈良 高尾山 昭

いわし雲石段多き漁師町

伊勢市 奥田 豊

セコシアの並木は高く秋澄めり

見附市 岡村 文字

空っぽになるまで鳴くか残る虫

東京 望月 清彦

△評▽秋が深まった頃にまだ鳴いている虫。ただひとついつまでも続く低い声を耳にした時の、語りかけるような実感。

いつの間に一人はくれて昔狩

次栗市 宗平 圭司

△評▽マツタケ狩りだろうか。もっと奥にありそうと熱心に探しているうち、ふと気づいた。

鱚雲思ひ出追へば遠さかる

川西市 近藤三容子

おのずから出ている答はったんこ

京都市 松尾 昌典

崩れ築ダムができるという噂

雲南市 熱田 俊月

湖昏れて花枝のこぼれけり

枚方市 門川 清秀

雲中に籠る鴉や鳥威し

横浜市 相沢恵美子

心なし淑やかに飛ぶ秋の蝶

大阪市 浜崎美智代

埒明かぬこと考へる夜長かな

横浜市 菅沼 葉二

柚子味噌をなめて晩酌進みけり

土浦市 今泉 準一

何事もなき一日の酔芙蓉

西東京市 鈴木 勲

△評▽スイフヨウは、朝は白いがピンクに変色し色を深め、1日で花を終える。次から次へ咲きつづける静かな野性を思わせる表現である。

化野を護る焔や曼珠沙華

高砂市 嶋谷タクオ

△評▽かつて化野は京都の風葬の地、無縁仏が葬られてきた。今、その仏をマンジュシヤゲが守る。

封開けて三粒噛む今年米

常陸大宮市 笹沼 實

初囀の水光らせて静ひぬ

弥富市 富田 範保

寝息しづかに銀漢へつづく闇

川越市 峰尾 雅彦

円らなる黒きまなこや今年鶯

北九州市 土居 康二

六角ネジ千個積み上げ夜業終ふ

東京 徳原 伸吉

神官の木靴が二足薄紅葉

平塚市 日下 光代

白髪の不意に潤む目夜学の師

東京 石川 黎

身に入むや旧友からの長電話

東久留米市 夏目あたる



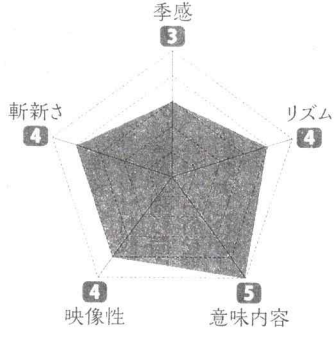
注目の一句

塩見恵介

触覚の片方無くも跳ぶ飛蝗

水芭蕉

チャートで採点



何者かに襲われたバツタだろうか。片方の触覚(触角)を失いながらも平常を生きるバツタへの称賛の句。「跳ぶ」というのはバツタらしさの典型的な生命行動で、換喩的に読めば、人生訓めいた印象を讀者に提供する。俳句は短詩であるから、作者の意図は十全に盛り込むことはできない。讀者の善意の読みによって成立する。この句の場合、「無くも」という逆接の措辞に誘導され、バツタのけなげな姿に識は集中する。ヒューマンティーあふれる世界だが、一方で作者意図の意味性が強すぎると文芸としては通俗に陥る危惧もある。「無くて跳ぶ」あたりのさらりとした措辞でも充分味わいのある一句。(しおみ・けいすけ 俳人)

アプリ 俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 毎日新聞社は富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんで俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら